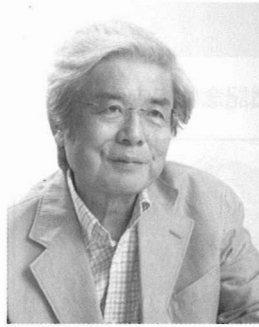


■ 賛同者からのメッセージ ■



養老孟司氏

映像を通して自然や科学の世界を理解し、教育にも役立てていくことを目的としているサイエンス映像学会の会長も務めているが、東日本大震災では膨大な映像や写真の記録をどう保存するかということも問われている。問題は何を残し、何を守るのか。逆に言うと、どう生かすかということでもある。そして残すには必然性があるのだ。

大事なのは現物であり、現物に接する現場の人間だ。ロンドンの自然史博物館に長年通っているが、一千万もの数の昆虫の標本についてみても、一匹あたり一年に10円もかけている。将来に残していくべきものに対する真剣さ、そして現場で物事にあたる人間の態度が違っているように思う。

そして、自然史博物館では、資料を単に管理するのではなく、オープンにして人に使ってもらうのが、現場の人間の仕事だという意識を持っている。だから学問が生きているし、たとえそれが現在すぐに役に立たないということであっても、将来を見据えて、非常に深い懐で物事、世界

を見ているように感じられるのだ。

こうした姿勢は、ナショナル・トラストの発祥地である英国から日本も参考にできるのではないだろうかと思う。そして、ナショナル・トラストも日本型の立ち上がり方があっていいし、そうあらねばならないだろう。

自然・文化遺産を含め、復興は民間が中心にやらなければならないと思っている。こうした運動のプロセスが人を育て、また学びにもつながっていく。

大事なのはどこまで本気かということだ。そしてそれを見極める目も重要である。